

## IV 南面西門（若犬養門）の調査（第133次）

南面西門の調査は昭和56年10月1日から開始し、門・南面大垣・二条大路・池状遺構・南北溝などを明らかにして昭和57年2月9日に終了した。発掘総面積は約2,700㎡である。

調査地の中央には、東西方向の道路と東西および南北方向の用水路とがあり、用水路の交点付近が南面西門跡と推定され、東西方向の用水路を境にして南は北より一段低くなっている。このため調査地区は4区にわかれた。

### 遺 構

調査地周辺の平城宮造宮前の地形は、東から西へ向って緩やかに下降する低地で、造宮に際して大規模な整地を行っており、調査区西半部ではとくに厚い盛土がある。検出した主な遺構には、南面西門基壇・南面大垣・宮内の池状遺構・二条大路・同北側溝・池状遺構から大路北側溝に流れ込む南北溝・宮内の東西溝・掘立柱建物などがある。

南面西門SB10200 基壇は著しく削平されており、礎石はもちろん根石も残っていなかった。門全体は整地土の上に築かれており、基壇外装の痕跡もなく、直接に基壇規模を示す資料は得られなかった。しかし、基壇底部の推定柱位置に平面円形の基礎地業が検出でき、門の平面規模は桁行5間、梁行2間、各17尺（約5.1m）等間であることが判明した。円形基礎地業は北側柱通りでは東の4ヶ所、棟通りでは東から4・5番目の柱位置、南側柱通りでは東から4番目の柱位置の計7ヶ所を確認した。径2.6～3.0m、深さは最も良く残っているところで0.7mあり、内部を版築によってつき固めたものである。この地業の底面の高さは北側柱通りと棟通りの位置ではほぼ同一であるが、南側柱通りではそれより0.4m低い。なお、この円形基礎地業は柱位置すべてに行なったものではない。そのような施工法の違いは、門・大垣およびその周辺の整地の状況とも関連するらしい。すなわち、門・大垣およびその周辺では、まず一帯を埋め立て、次に大垣・門の棟通りにあたる部分のみを版築状に整地し、第3段階でその北側と南側とを造成

するという手順を踏んでおり、掘り込み地業は行なっていない。円形基礎地業はこの整地土を掘り込んで行なっているが、円形基礎地業のない門西北部では、第3段階の整地の過程で部分的な版築がなされている。柱位置で、円形基礎地業を行わずにすませている理由の一端は、こうした前段階の整地のありかたに求められよう。なお、調査区内で南面西門に脇門が存在した痕跡は認められなかった。また、南面西門の西北部にある溝SD 10225・10226・10228は近世以後の溝。

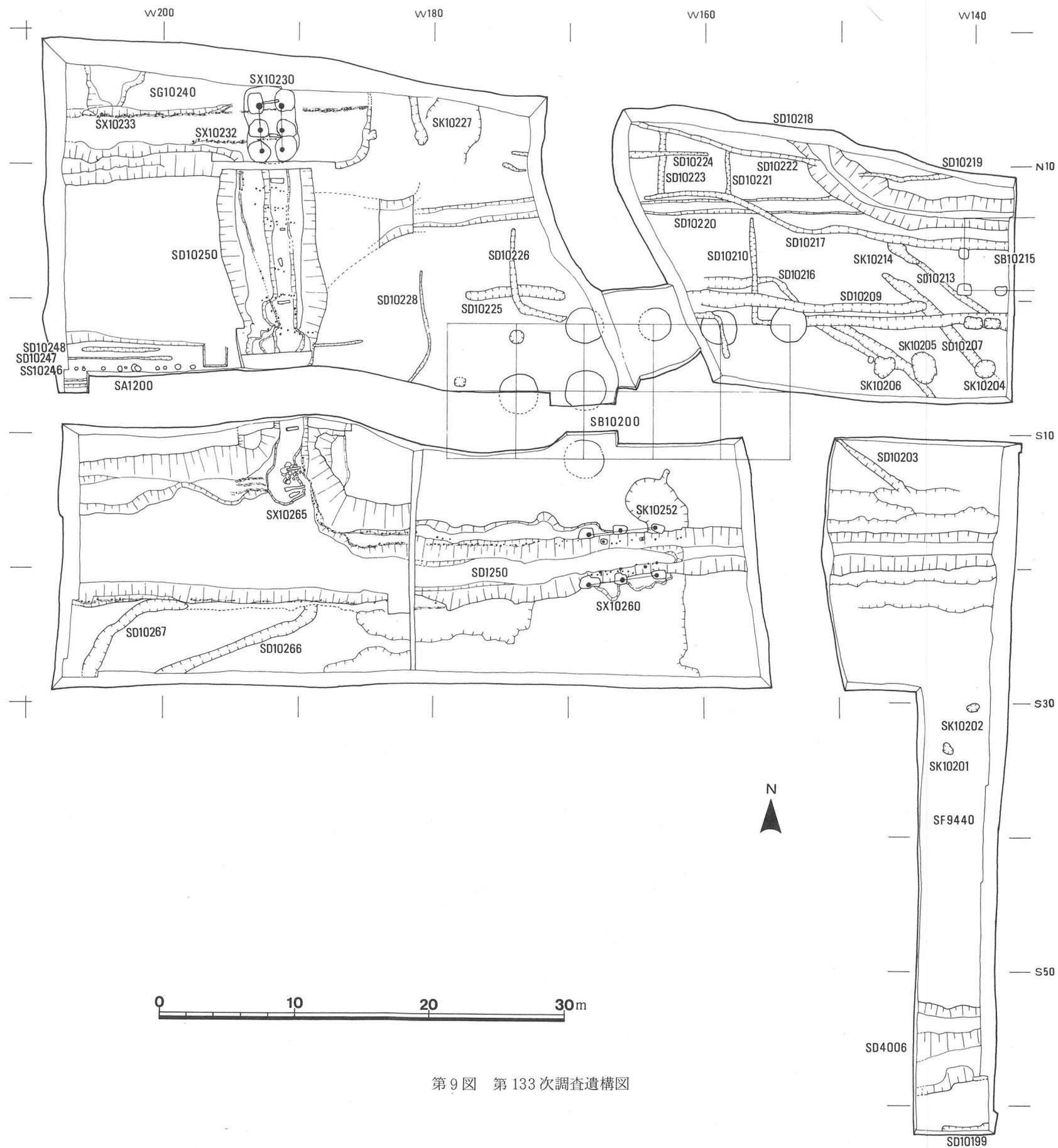
土壙SK 10227 発掘区の北端にかかる土壙状のもので、溝の可能性もある。帯金具が出土している。

南面大垣SA 1200 南面西門にとりつく大垣は、門の東側では削平のために残っていなかったが、門の西側で約10m分を検出できた。ただし、現用水路のため、検出したのは大垣の北半分に限られた。したがって、今回の調査区内では大垣の全幅は明らかにできなかった。大垣本体の築土はわずかに0.15m残るのみであったが、北側犬走りは幅約2.0mあり、比較的良く残っていた。犬走り上面には版築の際に堰板を支える添柱穴とみられる掘立穴が点々とある(SS 10246)。穴の間隔は0.4～1.3mと一定せず、一部には重複も見られ、大垣の修築が考えられる。このほか犬走りには、東西方向の細溝が2条通っている(SD 10247・SD 10248)。なお寄柱の痕跡は検出されなかった。

L字形溝SD 10210 門の東北隅柱位置の円形基礎地業に重複し、それに先行する溝である。遺物はほとんどなく、短期間で埋められたものと考えられる。

東西溝SD 10220 SB 10200の背後を走る溝である。幅1.2m、深さ0.4mで、西で南にゆるくカーブし、幅が広くなり、南北溝SD 10250に達している。東端は斜行溝SD 10218によって破壊されている。このほかSD 10221・10222・10223・10224などの細溝があるが、出土遺物はなく、宮廃絶後のものとする。

掘立柱建物SB 10215 門SB 10200の東北にある掘立柱建物で、梁間2間の東西棟と推定される。柱間は各9尺(約2.7m)である。建物の西北部が溝SD 10217・SD 10218によって破壊されており、東は発掘区外になるため全体規模は不明である。この建物の西側には炭化物の充満した浅い土壙SK 10214があり、



第9図 第133次調査遺構図

平城宮土器Ⅲの土器をともなっていた。斜行溝SD 10207・SD 10213・SD10216はSB 10215・SK 10214に先行し、SK 10204・SK 10205・SK 10206は近世以降の陶磁器を含む新しい時期の土壌である。

池状遺構SG10240 門SB 10200の西北で、東西約22m、南北6～10m、深さ1.5mの池状遺構の東南部分を検出した。周辺に残る畦畔の状況から推定して、池状遺構は発掘区の西および北に広がるようであるが、全容は把握できない。池状遺構は旧秋篠川流路の窪地を利用したものとみられ、その南岸に東西方向の2列の杭・シガラミ(SX 10232・SX 10233)を敷設している。池状遺構の底には何か所か深い溜りがあり、土器・瓦とともに木簡、木製品が堆積していた。池状遺構の埋土の最上層には10世紀初め頃の遺物が含まれており、池状遺構が最終的に埋まった年代を示している。

南北溝SD 10250 池状遺構SG 10240から南面大垣を通して二条大路北側溝SD 1250へ通ずる溝である。この溝は幾度かの改修によって複雑な変遷をたどっている。大垣位置での土層の堆積状況を中心にその変遷をみると大きく5期に分けられる。まず、宮造営前にこの位置にあった旧流路を改修して整え(I期)、その後、バラス混りの黄褐粘土で埋めた第1次の暗渠としている(II期)。ついで第1次の暗渠をとりはらって、高い位置に第2次の暗渠に付け換えており(IV期)、その間に開渠となっていた時期がある(III期)。溝底中央のところどころに残る長さ約1m、幅約20cmの板はIV期の暗渠の台板とおもわれる。これらの板のうち、旧位置を保っているもののレベルを測定するとほぼ水平である。IV期の暗渠が撤廃されたあとは開渠となる(V期)。SD 10250の大垣の以北には溝と直交する東西方向の杭・シガラミ列が6条あるが、これらはV期の溝にともなうと考えられる。

SD 10250の北端、池状遺構SG 10240の東端近くには6本の掘立柱からなるSX 10230がある。掘形はまず大きく楕円形に掘り下げ、そののちに柱1本毎の掘形を掘っている。柱根は南北方向にそれぞれ筋を通してはいるが、完全に平行ではない。各柱の間隔は東西方向が北端で1.6m、南端で1.5m、南北方向は東・

西とも北から 1.8 m・1.5 m である。柱根の太さは 0.36～0.50 m とマチマチであり、北端の 2 本は特に太い。すべて転用材である。池状遺構の水の流れを開閉する樋の施設で、IV 期のものと思われるが、その構造の詳細を復原する資料は乏しい。強いて類例をあげれば第 16 次調査で検出した SX 1830 ぐらいであろう。

SD 10250 の南端、二条大路北側との合流部では、はじめ河原石の石組を設け水受けの施設としているが、後には埋まって浅くなっている。南北溝は南で東にやや振れる方位を示している。

二条大路 SF 9440 SB 10200 の棟通りから南 12 m で北側溝 SD 1250 を、南 48.8 m で南側溝 SD 4006 を検出した。北側溝 SD 1250 は発掘区の東寄りでは幅約 3.0 m、深さ約 1.2 m で、西へゆくにつれて広がり、南北溝 SD 10250 との合流部以西は幅 10 m を越え、深さも 1.5 m になる。門の前面の北側溝には、間口 2 間、奥行 1 間の橋脚 SX 10260 がある。中心を門の心と揃え、柱間寸法は正面が各 8 尺（約 2.4 m）、奥行が 12 尺（約 3.6 m）である。橋脚の内側には、小掘形内に据えた細い柱根もあり、SX 10260 とは時期を異にする橋脚の可能性もある。橋脚から西方では、両岸に杭・シガラミによる護岸を行っており、部分的には、高さ・位置を変えて 2 段になっているところもある。溝肩の位置も変遷があり、側溝が幾度かの改修をうけて、最終的に北側溝の示す方位が西で大きく南に振れる結果となっている。橋脚 SX 10260 はこの方位と同じ振れをもち、さらにその掘形が改修をうけた岸に掘りこまれていることからみて、宮造営当初にさかのぼるものではない。ただし、これに先行する橋脚の痕跡は検出していない。南側溝 SD 4006 は幅約 6.0 m、深さ 0.7 m の素掘り溝である。北側溝と南側溝との間は二条大路路面にあたり、その路面幅は 32 m であり、両側溝間の心々距離は 36.8 m である。路面は発掘区東寄りでは薄い整地層があるだけで、礫敷などの舗装はみとめられない。発掘区中央以西は厚い盛土によって二条大路自体を造成している。路面にある土壌 SK 10201・SK 10202 は弥生土器を含む小土壌である。斜行する素掘り溝 SD 10266・SD 10267 は無遺物でその年代は不明である。

## 遺物

多量の土器・瓦・木製品のほか、木簡・銭貨・金属製品など多様な遺物が出土した。奈良時代の遺物が大部分を占めるが、平安時代に降る遺物もあり、その他に弥生式土器、古墳時代土器、埴輪など宮造宮前に属する遺物も出土した。

木簡 計約 1,150 点出土した。大部分が二条大路北側溝 SD 1250 から出土しており、ほかに池状遺構 SG 10240、南北溝 SD 10250 から出土している。年紀のあるものには「神亀三年」「天平八年」「天平十五年」「天平勝宝二年」（以上 SD1250 出土）、「神亀六年」（SD 10250 出土）などがある。  
次に一部の釈文をかかげる。

<二条大路北側溝 SD 1250 出土>

(表) 若犬甘門□

□

(裏) 又有四段

□

□

衛門府進和炭二斛□□□□□ 天平勝宝三年正月廿五日番長道守臣努多万呂  
木屋坊

<南北溝 SD 10250 出土>

(表) 内膳司牒 小子部門司 堅魚三古 息□三古

塩一古 海藻一古

[宮進カ] [如件カ]

(裏) □□□□□

状故牒

正六位下行典膳雀□□□□□ [真カ]

瓦 大量の丸瓦・平瓦のほかに軒瓦が 472 点あり、鬼瓦、慰斗瓦、面戸瓦、刻印瓦少量がある。軒瓦のうち時期の判明するものについては別表のとおりである。出土した軒瓦の年代が、平城宮瓦編第 I 期に属するものが大多数を占め、しかも、そのうちで藤原宮式が高い比率を示す点はこれまでの宮城門・大垣地域の調査結果と

軒瓦 時期	軒丸瓦	軒平瓦	計
I 期	110 (うち藤原宮式64)	209 (うち藤原宮式186)	319
II 期	26	33	59
III 期	8	5	13

同様である。

土器 出土土器の大半は土師器・須恵器の食器類であり、これに少量の緑釉・三彩陶器がともなう。平城宮土器の III～V にわたるものが

第 133 次調査 出土軒瓦一覧

多く出土しているが、平安時代に降るものもあり、池状遺構 SG 10240 からは10世紀初めに編年される土器も出土した。これらの土器の中には「靈龜二年七月知」「厨菜」「厨」「雅楽寮」「常」「盛二」「大」と墨書きしたものが含まれている。

木製品 曲物、杓子、物差、桧扇、人形、削掛け、人面墨画（裏に「神護景雲」の墨書がある）、刀子柄、斗の雛形などの木製品が出土し、人形には鉄釘を打った例がある（SG 10240）。このほかに籠や草鞋などの編物も出土した。

金属製品 帯金具、鉄釘、挂甲小札、刀装具、刀子などがある。銭貨としては「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」が出土した。

### まとめ

今回の調査において、南面西門（若犬養門）・大垣・池状遺構・南北溝・二条大路を一体として明らかにすると共に、平城宮の造営にあたっての造成の状況などを具体的に解明したことは大きな成果であった。以下要点をまとめる。

南面西門（若犬養門）については、第16次調査の南面中央門（朱雀門）、第122次の南面東門（壬生門）の調査とあわせて、平城宮南面の3門すべての調査がおわったことになる。これで宮城門と外周部の状況がさらに一層明らかとなった。とりわけ、円形基礎地業から復原できる南面西門の規模は5間×2間、17尺等間で、南面中央門（朱雀門）と同様であり、西面中央門（佐伯門）、西面南門（玉手門）、南面東門（壬生門）が梁間15尺2間と推定されているのとは異なることは注目される。朱雀門以外の宮城門のうち、柱の位置が判明したのは今回の南面西門がはじめてである。また、出土木簡に「若犬甘門」の記載がみられることは、南面西門の門号を示す直接の史料として重要である。さらに、池状遺構と大路北側構とを結ぶ南北溝のように、旧地形に合わせて宮内排水系路を設置している点も注目される。しかし、池状遺構が、従来、秋篠川旧流路と推定されていた現畦畔の乱れとどのように関連するのか、また、それが『続紀』に頻出する「南苑」や天平宝字6（762）年3月壬午条の「宮西南に於て新たに池亭を造る」という記事に対応するものか否かなど、今後に残された課題も少なくない。